



No.11 2022.6.7
 岩手県教職員組合
岩手教育総合研究所
 〒020-0022
 岩手県盛岡市大通一丁目1-16
 岩手教育会館4F 岩手県教互センター内
 TEL/019-623-4432 FAX/019-652-9535
 E-mail:j.sato8252@gmail.com

リレー特集

岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～



乳児院の現場から子どもたちの成長を考える



まつ お
松 尾 みさき
 (善友乳児院 院長)

略
 歴

秋田県横手市出身

2002年 山形大学理学部卒

岩手県農林水産部入庁

2008年 岩手県農林水産部退職

善友乳児院入職

2018年 善友乳児院 院長就任

2021年～全国乳児福祉協議会制度対策研究委員長

『乳児院』という施設をご存じの方がどれ位いらっしゃるでしょうか。乳児院は、児童福祉法第37条に規定されている児童福祉施設で、様々な事情によりご家庭で養育できない0歳～就学前までの子どもたちを24時間365日お預かりする入所施設です。現在、県内に2か所、全国には145か所（令和3年4月1日現在）設置されています。

平成以前は、保護者の死亡や行方不明等により、子どもを養育する家族がいない場合などに子どもをお預かりする事が多かった乳児院も、平成に入り児童虐待による入所が主となりました。また、近年は虐待に加え、父母の精神疾患による入所も増えています。

乳児院に入所するケースのほとんどは、児童相談所を通して“措置入所（長期間）”や“一時保護（約2か月以内）”という形で入ってきます。これらは緊急性が非常に高く、親から子どもを切り離さなければならない状況にある事を意味します。ここ数年は一時保護が措置を上回っており、さらに夜間や土日祝日関係なく緊急で保護される緊急一

時保護が増えています。

どのような事情であれ、0歳～就学前までのお子さんが保護者や家族から突然切り離され、全く知らない環境の中で生活する事がいかに子どもにとって負担の大きいものであるかは、子どもを育てた経験のある方や子どもに携わるお仕事をされている方であればよくご存知だと思います。そのような不安や恐怖の中にいる子どもたちを安全な建物の中で温かく迎え入れ、子どもの不安に寄り添い、安心して乳児院の生活に馴染んでいけるよう養育する事が乳児院の役割の一つです。



私たち乳児院の職員は、お母さんとの間で形成される愛着をととても大切に考えています。なぜなら通常、乳幼児はお母さんとの間で愛着を形成し、その鋳型を基に他者との関係を構築していくからです。乳幼児期におけるお母さんとの関係は、その後の人生に大きく影響を与えるものです。

しかし、乳児院に入ってくる子どもたちの多くは、様々な理由から、保護者との間での愛着形成が上手く出来なかったり、途切れてしまった背景を持っています。特に、虐待を受けた子どもたちは、“怖いと思った時”や“不安を感じた時”に自分をしっかり受け止め守ってくれるはずの大人（保護者や家族）から傷つけられた経験を持っています。そのような子どもたちは、自分で自分の身を守るために、健全な家庭で育った子どもとは異なる表現方法や反応を示すようになります。

そのため、私たちはお母さんに代わって信頼できる大人との関係づくりをやり直し、“自分を大切にできる”“大人や他者は信頼できる”という鋳型をつくっていきます。そして、不安な時にしっかりと受け止め守ってくれる大人の存在を乳児院の生活の中で子ども自身が感じ、繰り返し確かめながら、健全な家庭で育った子どもたちと同様の表現方法や反応を獲得できるようにしていきます。そうして少しずつ安定した人間関係を築く基盤をつくっていきます。

乳児院では子どもたちとの愛着基盤をしっかりと形成するために、担当養育制という制度を早くから取り入れてきました。子どもたち一人ひとりに専属の担当養育者が付き、担当養育者はお母さん代わりとなります。子どもたちは家庭復帰や次の養育先へ行くまでの間、保護者との間で育んだ愛着の根っこを枯らさないように、大事に担当養育者のとの間で育みます。

乳児院への入所当初は、大人に抱っこされる事を嫌がったり、少しの物音にも敏感で泣きやすかったり、暴言や乱暴な行為が多かった子どもたちも、養育者の丁寧な声がけや関わりによって、少しずつ表現方法や行動に変化が生じてきます。乳児院に来て2週間くらい経つと、ほとんどの子どもは入所当初の特異的な表現や行動が治まってきます。私たちも毎回、子どもたちが持つ順応性

や吸収力に驚かされます。

乳児院では大人だけではなく、子ども同士の関わりや声掛け、つながりも大切にしています。保護者や家族から離れて寂しい思いを、子ども一人で抱え込まず少しでも楽しく過ごせるよう、各職員が遊びや行事、生活の工夫を凝らしています。

乳児院で生活する子どもたちは、年齢的にも直接学校とつながりを持つ事は殆どありません。しかし、昔から『三つ子の魂百まで』という言葉があるように、乳幼児期の成育歴はその後の学齢期にも大きな影響を与えます。乳児院に入所する子どもたちの家庭状況は不安定であることが多く、退所後も教育保育施設や学校をはじめとする様々な関係機関の支えがなければ在宅での生活が難しい場合があります。

教育と福祉、行政区分は異なるかもしれませんが、一人の子どもを支える一つのチームとして、今まで以上に協働して行きたいと思っています。不幸にも家庭に恵まれない子どもたちが岩手にも沢山います。そうした子どもたちの中に、少しでも大人に愛された経験が記憶として残るように、先生方と共にこれからも子どもを支える一助となれるよう努めていきたいと思っています。



発達障がい当事者との関わりから、学校に期待すること



すずき
鈴木 ゆうや
(薬剤師)

私は現在、調剤薬局で薬剤師として勤務する傍ら、趣味で音楽活動をしています。そこで一緒に活動しているグループメンバーが発達障がいの診断を受けており、障がい者手帳を取得しています。グループの活動コンセプトの一つを「当人の発達障がいと向き合う」としており、私自身も素人ながら、発達障がい当事者の困難や悩み、成長と向き合っています。

「発達障がいとの出会い」

きっかけは私が大学生の時、家庭教師のアルバイトで担当した高校生のY君です。薬学部を受験したいが、理科が苦手とのことでした。どうしても薬学部は理科からは逃れられないので、私は彼に化学・物理を教えることになりました。真面目で勤勉なのですが、やはり勉強時間の割に学力が伴っていないこと、何よりもコミュニケーションが硬いことがとても気になりました。実際に教えてみると、どうも理解が本筋からズレていて、Y君への指導は「どこからズレが始まっているのかを探して」、「それを言語化して伝える」、ということの繰り返しでした。

こうして1年が経ち受験が近づいてきたある日、「先生と同じ大学に行きたい」と志望校を変更。最後の指導日の授業を終わらせた後、Y君のお母様が「Y君が子どもの頃に軽度の発達障がいと診断されていた」「大人になって仕事に困らないよう、薬剤師の資格を取らせておきたい」ということを仰っていました。

結局Y君はこの変更した第一志望には不合格で、私立大学の薬学部に進学。ただ、「先生と同

略歴

- 1982年、青森県弘前市出身。
- 東北大学薬学部卒業後、ドラッグストア店舗勤務、その後は本部で従業員教育・数値管理・業務改善などを担当。
- 現在は調剤薬局勤務。
- 大学在学中に発達障がいに興味を持ち、発達障がいの子どもたちの支援ボランティアを経験。
- 現在、発達障がいをもつグループメンバー（障がい者手帳取得済み）と趣味の音楽活動を行っている。

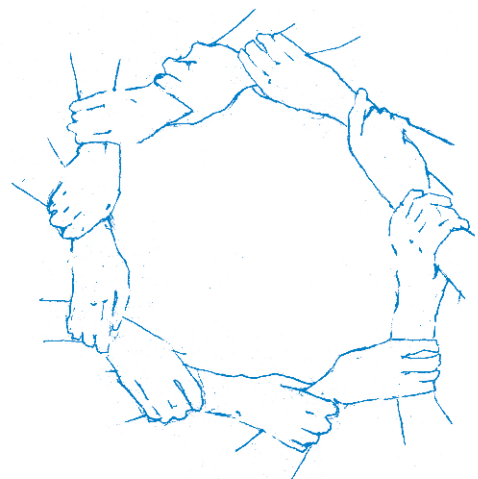
じ大学に行きたい」という気持ちを持ち続けてくれたのか、卒業後に私の母校の大学院に進学し、現在は社会人として立派に働いているようです。

この経験から発達障がいに興味を持ち、勉強したり、発達障がい児の支援ボランティアに参加したりしました。

「人材教育」

その後一般企業に就職して数年が経ち、部下を教育する立場になりました。比較的規模の大きい企業だったこともあり、業務遂行に「マニュアル」があり、そのマニュアルを逸脱しないよう画一的な教育がなされていました。ここで私は「指導・教育＝被教育者の過ち（マニュアル違反）を正すこと」と捉えている企業風土にとっても違和感を覚えていました。

そこで私は、部下一人一人の背景、何が得意で何が苦手か、を意識して見ていくようにしました。また会社にとっての部下の「悪いところ」も当然正していかなければなりません、私は「悪いと



ころ」も「良いところ」も気付いたときに伝えるようにしていました。人は短所の方が目につきやすいもので、意識しないでいると「ダメ出し上司」となりかねないためです。

特に「問題児」と言われている従業員ほど、何か本人の意思があって逸脱した行動を取っており、またその逸脱傾向は子どもの頃から続いていることも多く、周囲から叩かれる経験が続いてしまっていて、劣等感を持ち、「人の言うことを受け入れられない」という状態になってしまっている傾向があると感じました。

学生時代の経験と結びついて思ったことは、「人それぞれの長所に目を向け、得意不得意を把握して、伝え方を工夫する」ということは、発達障がいをもつ人でも健常者でも、変わらず教育のベースになるものではないか、ということでした。

「音楽活動における発達障がい当事者の変化」

先に書いた通り、趣味の音楽活動のグループメンバーが発達障がい当事者です。

当初はお世辞にも上手とは言えない状態でした。掘り下げてみると、「練習→繰り返すこと」「上達→清い心を持つこと」等、課題解決とは真逆の思考になっていました。音楽的にも精神的にも未熟で、なかなか周囲から音楽仲間として認めてもらえず、劣等感を抱いていました。

3か月のトレーニング後、演奏活動と練習を続けていく中で、周囲が本人を見る目が少しずつ変わっていった実感を持ったようです。また精神論ではなく知識や技術習得の大切さに徐々に気づいていったようでした。

何よりも、もともと新しい場所で「自分が馬鹿にされている」という思いから人とうまくコミュニケーションを取れなかったものが、3年が経ち自分から人の輪に入っていけるようになりました。劣等感がなくなったわけではありませんが、自分の成長を感じて、人とコミュニケーションを取る勇気が出ているようです。

「得意なことは自信に繋がる」

発達障がいのお子さんは、その特性上周りと違う行動を取りがちで、そのせいで叱責されること

も多く、環境によってはいじめを受けてしまうこともあるでしょう。ここで本人が劣等感を抱え、人とのコミュニケーションが怖くなってしまうということが、発達障がいの2次的ですがとても大きな問題となっていくと思います。

その一方で「できた」という達成感や成功体験は自信に繋がり、その自信がやる気を生み出すということは、発達障がいの当事者でなくても大人でも経験することです。例えば、学業が得意、運動が得意、というお子さんは分かりやすく自信を持っていくと思いますが、人目につかないようなことが得意なお子さんや、そもそも今得意と言えるものが無いお子さんもたくさんいることでしょう。

学業に限らず、様々な体験をすることは、好きなこと・得意なことを見つけるきっかけとなり得ることです。そこで得た達成感や成功体験は、お子さんのその先の成長に必ずプラスになることだと思います。

社会で生きる上で、学力も大切であることは言うまでもありません。教育水準が高い者ほど将来選べる進路の幅が広がります。その上で、学校は様々な体験ができて、その中で子どもたちが達成感・成功体験を積み重ねていける場所であってほしい、と考えています。

一つでも達成感を感じられたり、誰かに褒められたりすることで自信をもっていくお子さんが一人でも多い世の中であってほしいな、と思います。





教室の窓から



“ランド”か“シー”か？

県立の児童自立支援施設 T 学園に併設された H 分校に勤務して 2 年目、私は持ち上がりの 3 年生担任になった。中 2 の始めに担任した時には女子生徒 1 人だけだったクラスも、中 3 の 4 月には 5 人の在籍となり、さらに転入があって、1 学期の後半には男子 4 人女子 3 人の計 7 人になっていた。

1 学期の途中から、学年担当の私が秋の修学旅行に向けて企画をすることになった。県内では 3 年生の秋に修学旅行を実施する中学校はほとんどないと思うが、H 分校では、転入してきた生徒が前の学校で修学旅行に参加していない場合でも修学旅行に行けるようにするために、中 3 の 2 学期に実施することにしていた。

ちなみに、当時の生徒たちの家庭は、そのほとんどが経済的に困難さを抱えている状況であったが、そのような場合でも、旅行費用の基本部分は国から補助があり、現地で必要な経費は県からの補助で賄うことができた。

企画を始めて、一般の学校ではあまり経験しない課題に直面することになった。

まず引率者だが、7 人の生徒に学校と施設の職員合わせて 7 人が引率することになった。宿泊先では、1 つの部屋に生徒同士だけの宿泊はさせられないため、職員と生徒の部屋割りを考えての対応だった。

次に交通機関だが、新幹線はともかく都内の移動に際し、生徒と職員合計 14 人では、費用の面から貸し切りバスは利用できない。やむなく 14 人で JR と地下鉄を乗り継いで移動することにした。

しかし、現地でその都度乗車券や入場券を手配するのは大変だ。そこで、分校のある M 市内の小さな旅行代理店に旅行全般の手配を依頼するとともに、添乗員さん 1 人に同行してもらうことにした。大手旅行業者ではこのような対応はしないと思うし、そもそも生徒 7 人の修学旅行は引き受けてもらえないかもしれない。地元の小さな旅行代理店はそれらのことに丁寧に対応してくれた。

ところが、本校の校長から異議があった。「たった 7 人の生徒のために添乗員はいらないだろう。費用削減のために、職員だけで対応したらどうか。」とのことだった。普段から、あまり分校の様子を見に来ることのない校長だったので、数だけで考えたのだろう。

しかし、7 人の中には小学校 1 年生ぐらいの学力・生活力の生徒もいて、その子たちの手を引いて、大きな荷物を背負っての移動や見学は、相当な困難が予想される。私は校長に、「一度、生徒たちの様子を見に来てもらって、それから判断をお願いします。」と直訴し、その後、なんとか添乗員さんの同行をお願いできることになったのだった。

私が、修学旅行の企画にあたって、特に配慮したいと考えたことが 2 つあった。

1 つは、2 泊 3 日の旅行中の食事 7 回全部を「バイキング形式」にすることだった。生徒の中には、学園に来る前およそ 1 ヶ月の間、親から食事を与えられていなかった生徒もいた。その間どうしていたのか尋ねると、最初は家にあった砂糖や小麦粉をなめて過ごし、おなかがすいて我慢ができず、おじいちゃんの財布からお金を抜いて買って食べたが、それが見つかって叱られ、その後万引きを繰り返して学園に来ることになったという。

幼い頃から衣食住が満足な状況になかった生徒たちも多い中、修学旅行中だけでも好きなものを好きなだけ食べることができる体験をさせてやりたいと考えたのだった。

もう 1 つ、見学・訪問場所については、できるだけ自分たちの希望や意見を出し合いながら、7 人全員の納得でそれを決めさせるということだった。聞いてみると、7 人全員が東京には行ったことがなく、新幹線に乗るのも初めてだという。

生徒たちだけの行動は認められないため、一般の学校で実施しているいわゆる「自主研修」はできないが、その代わりに見学先の希望を出し合い、可能な限りそれをコースに入れられるようにした。また、事前にネットで見学先の情報を調べることもした。

その中で、ある時ディズニーランドのことが話題になった。

「先生、ディズニーランドってあるんだよね。そこには修学旅行の時に行くんですか?」

「行ってもいいけど、別にムリして行かなくてもいいよ。みんなは東京に行ったことがないみたいだから、ディズニーにも行ったことないんだよね。“ランド”だけでなく“シー”もあるんだよ。」

「えーっ!?どう違うんですか?」

「テーマやアトラクションが違うから、ネットで調べてみるといいよ。」

しばらくして、ディズニーランドをコースに入れるかどうか、話し合うことになった。

「ディズニーはどうするの?」

みんな、口々に「行きたいです!」と言う。

「じゃあ、“ランド”と“シー”はどちらがいいのかな?」と聞くと、

「先生、私たち女子 3 人は相談して“ランド”がいいということになったんだけど、男子は 4 人とも“シー”がいいって譲らないんです。」

「男女で意見が分かれたんだ?単純に多数決すると男子の意見で決まってしまうそうだね。」

「えーっ、いやだ!」

話し合いの時間が終わっても、どちらがいいかは平行線になり、結論が出なかった。

私は、昼休みに男子 4 人を別教室に呼んで、“シー”にこだわる理由を尋ねることにした。

「君たちはどうして“シー”がいいのかな?もしかして、“シー”ではアルコールが飲めるってことが理由ではないよね。」

「先生、僕たちはそんな悪いことは考えていませんよ。本当です。」

「そう?じゃあ何で“ランド”は嫌なの?」

4 人は顔を見合わせ、しばしの沈黙があったが、男子のリーダー格の K が口を開いた。

「理由を聞いても絶対に女子には秘密にすると約束してくれますか?」

「いいよ、約束しよう。」

「じゃあ、話しますが・・・、“ランド”には『なんとかマウンテン』というアトラクションがいくつかありますよね。それってジェットコースターみたいだけ

ど、僕たち、今までジェットコースターにも乗ったことないんです。もし、乗ってみて怖くて叫んだりした時、女子に見られたら恥ずかしいじゃないですか・・・。」

真面目な顔で、他の 3 人もうなずく。

私は、なんとか笑いをこらえながら彼らをなだめようとした。

「そうか、そういう理由で“ランド”に反対していたんだね。でも、大丈夫だよ。マウンテンは普通のジェットコースターほど怖くないし、心配だったら乗らなくてもいいんだよ。乗りたいアトラクションごとに 2～3 人でグループを作って先生と一緒に乗ればいいんだよ。“ランド”にも怖くないアトラクションはいっぱいあるから、調べてみるといいよ。」

「そうですか。よかったあ!じゃあ、そういうことでもいいのなら、“ランド”でもいいです。今の話は、女子には内緒にしてくださいね。」

「うん。約束するから安心していいよ。」

その日の帰りの会で、男子から“ランド”に行ってもいいとの話が出て、“ランド vs シー”の論争にようやく決着がついたのだった。女子は、「どうして“ランド”に行く気になったの?」と怪訝そうだったが、男子 4 人は「俺たちが譲ってやるからさ」という風に、少し威張っている。

私は、それを見ながら、ようやく笑いをこらえたのだった。(J)



IWATE 教育総研ニュースはホームページにも掲載しております。

<http://www.iwakyoso.gr.jp/soken/index.html>



QRコードは
こちらから!

